

玄洋社記念館

所蔵資料の調査始まる

「福岡市史」編さんで市の委員会

玄洋社の存在

近現代史で大きな比重

「福岡市史」の編さんを進めている同市の「福岡市史編さん委員会」(委員長、中元弘利・副市長)は、今年一月から、玄洋社記念館が所蔵する資料の調査を開始した。市史の「近現代」部門の編さんのための資料収集が目的で、記念館は全面的に協力している。

調査は、同委員会の「近代専門部会」(部会長、有馬学・九州大学大学院教授)の野口文さん(同市博物館学芸員)はじめ司書、学生などの担当者一丁四人が、毎週水、木曜日に記念館を訪れて行われている。現在は、書庫の書籍のリスト作りが行われ、書庫が終われば、軸庫などへと進む予定になっている。

記念館の所蔵品は書籍約二千三百点、書画類約二百点、そのほか先覚ゆかりの品など多数にのぼる。書籍には漢文で書かれたものや、和綴し本など、現



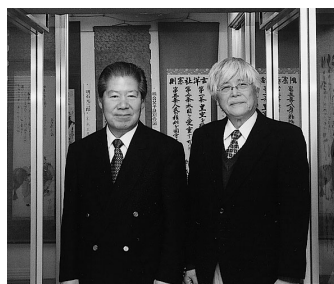
資料の調査をする市史編さん委員会の担当者の方々

代の印刷物とは異なる珍しいものが少なくない。この

念して刊行されたものがあ

ためリスト作りも困難を伴っているようだ。野口さんは「予想外に難しい作業だが、少し様子がわかってきた。蔵書から玄洋社の雰囲気も幾分かわかるような気がする」と話している。

福岡市史には、既に明治二十二年から平成元年までを対象に、市制百周年を記念して刊行されたものがあ



が、今回、編さんされるのは原始時代から西暦二〇〇〇年までの福岡地域の歴史を取り上げる。近現代部門は、明治維新から現代までを対象にするが、今回の編さんの第一の柱に、「東アジアの国際都市福岡・博多の歴史像を明らかにする」ことが据えられており、玄洋社の存在は、大きな比重をもってくる。

中元副市長が見学

福岡市史編さん委員長の中元弘利・福岡市副市長は「写真」は昨年十二月二十二日、玄洋社記念館を見学した。記念館の資料調査を前に「生の資料を見ておきたい」という希望で来館となった。

浅野秀夫館長の案内で頭山満翁はじめ諸先覚の書や、アジア独立運動家関係の貴重な写真などに熱心に見入っていた。



館報

発行 社団法人玄洋社記念館
郵便番号 810 0073
福岡市中央区舞鶴二丁目4番24号
電話 (092) 771 3203
FAX (092) 771 1326

玄洋社憲則

- 第一条 皇室ヲ敬戴ス可シ
- 第二条 本國ヲ愛重ス可シ
- 第三条 人民ノ権利ヲ固守ス可シ

相撲大会と総選挙

進藤 守康(遺稿)



此の基句は、江戸時代から力士の口から耳、耳から口へと傳へられて来たもので、その歌詞は長短自在、自由奔放で力士が歌う場合には、「ドスコイ、ドスコイ」という合の手の手拍子だけで、伴奏はなく、土俵中央のマイクを囲んで、七、八人の力士が次々に歌うものである、と、相撲用語解説には書いている。自分はある日父の酔態などを回想して感慨に勝へないものがあった。

珍らしいのは呼出太郎の櫓太鼓の打分で、早晩から打出しまで、各種各様の櫓太鼓の様相を、指先巧みに叩き別けて、聴衆を感動せしめた。中入後、幕内の土俵入や、横綱の土俵入は、さすがに観衆をアツと唸らせた。人浪にあふるゝ上下の花道を通じて、絢爛たる豪華の化粧回しに、隆々たる筋肉美が互に相映発して、真に相撲道にのみ見らるゝ壮美観で、巧妙な一片の錦繪を見るような気持であった。

最後に三役の大相撲は、栃光に海山、琴ヶ浜に若前田、栃錦に朝夕で、互いに妙技を悉して輪贏を争ひ、場内を熱狂の渦中に陥れた。そして大田山の弓取式で終幕となったが、その間警視庁音楽隊が、時々巧妙な演奏をして、観客の無聊を慰めた。

最近野球熱の異常なる勃興に伴ひ、演劇、映画等洋趣味の浸透が倍々眼立ってきた。拳闘やフェンシング等の餘技は兎もあれ、野見宿弥の大昔から、国技として尊重せらるゝ相撲道は、日本武士道の精髓として、長へに伸展を豫約せらるゝ技藝の尤である事を、茲に重ねて断言する。

(終わり)

再 録

来島 恒喜小伝

風 蕭々

柳 猛直

9

爆裂弾の轟音(続き)

東大から佐藤進博士、ドイツ人のベルツ博士等が官邸に駆けつける。宮内庁から三名の侍医、陸軍の軍医総監・橋本綱常もやってきた。

凝血で傷口にはりついて、ハサミで切り裂いて足の傷を調べてみると意外に重傷で、ベルツの記録によれば足を動かすと、骨がまるで袋に入っているように、ガサガサと音がしたという。

このままでは生命にかかわることがわかった。切断するより方法がないが、官邸にはもちろん手術の設備などあるはずがない。

応急措置で盆栽の台をもってきた。比較的大きな台であったので、二つ合わせると六尺近い大男の大隈を十分寝かすことが出来た。

この上に仰向けに寝かして全身麻酔をかけ佐藤博士が執刀して大腿部の上から三

大勢生きていた時代であった。

十月十八日の夜、同志の野半介は来島のことを、しきりに案じて眠れなかつたが、とるところと眠ったところで激しく戸をたたき音に起こされた。

「誰だ!」と言つと「おれだ。今、帰ってきた」という声は確かに来島である。急いで戸を開けてみる

「あなたには先日の手術を平気な顔をして見ておられましたが、切断した足を始末なさいましたが、よく気味悪くありませんでしたか」といふと北島は笑つて

「いや、私は何度も戦場に出て人の首を取ったことがあるし、山積みになされた死体を踏み越えて戦ったこともありますから、足や手の一本くらい何でもありませんよ」と言つた。

北島は、大和・十津川の天誅組の乱に加わり、藤本鉄石、吉村寅太郎等とともに戦つた人である。当時は維新の動乱の中で矢玉の中をくぐつてきた人が、まだ

「暮気を衝く(日が暮れかかっていた)我輩の馬車が轆轤(れきろく)車輪がきしむ形容)として門内の石だたみを徐行しつつあると突如として風体怪しき一人の書生が駆けて来た

と見ると手にコウモリ傘をさげている。これぞ、たれあるう刺客・来島恒喜である。彼はらんらんたる目を輝かして馬車のガラス越しに社内をつかがうや傘の内に隠し持てる爆裂弾をば、はつしと投げたのである。天地にとどろく大音響、四辺を包むもうもつたる硝煙、車軸は天に舞い車体は微塵に飛んで我輩は、どうと地響き打つて倒れた。倒れて人事不省となつた(「玄洋社社史」)

これは明治三十九年の聞き書きである。明治調のいささかオーバーな表現だが、この談話からは爆裂弾が馬車を直撃したようにとれ

「凶行者が投げつけた爆裂弾は同寅、門の石柱に当たりしやにて、その痕をとどめ」(十月十九日付・東京朝日新聞)

「馬車を目掛けて一弾を投げしが、たちまちにして轟音一、馬車のひだり幌に当たりて触発したり」

大隈の回想録では

(十九日付・日本新聞)

「弾は幌のカナメに当たり轟然と塵に砕けしが」(十九日付・郵便報知)

「弾はたちまち爆裂して轟然四方に飛び散り」(二十二日付・朝野新聞)

「来島の生前もつとも親交ありし野半介の鑑定によれば門柱に当たりて破裂し爆裂の大隈を傷つけたること事実なるに似たり」と或は然らんか。記して参考

来島の遺体は警視庁から麹町区役所に送られ十九日午前三時、青山の共同墓地に仮埋葬された。

同志が警視庁の許可を得て遺体を発掘したのが十月二十一日。遺髪を谷中の天王寺に納め遺骸は火葬にして遺骨は福岡に帰り十一月に入つて葬儀が行われるのだが警視庁では時を移さず連累者の追及をはじめ

取調べを受けている。頭山満は、たまたま大阪の旅館に宿泊していたところを警察官に踏み込まれ曾根崎署で取調べを受ける。

曾根崎署での頭山満の取調べは丁重そのものであったが、この時、頭山はカバンを一つ大事そうに抱え込んでいた。取調べの警官が「カバンの中身を改めさせて頂きます」といふと、「これは大切なものが入っているから見せられない」と断つた。そんなことを言えば一層見たくなるのが人情である。警官はカバンの中に、きつと重要なものが隠されていると思つたのだろ

う。なおも執拗に中身を調べてほしいと言つた。カバンにはカギがかか

ていて、カギは頭山の着物のたもとに入っている。「カギを貸して下さい」「いや、これは貸されぬ」と押し問答が続くうち頭山は根負けをして渋谷カギを渡した。

警官が喜んでカバンを開けてみると女性からきた艶書がたくさん出てきた。警官もあきれかたかバンの底から袱紗(ふくさ)に包んだものが出た。さては、というめき立つと

と記している。

頭山が、あわてて「あ、それはいかん、いかん。勘弁してくれ」と止める。「さては、この中に機密の文書を隠しておるな」と警官は喜んで袱紗包みを開いてみると中から極彩色の春画があらわれ

た。調べる方も調べられる方も、とうとう大笑になつたという。

東京、福岡その他で拘引された連中も共謀の証拠は発見されないで次々に釈放される。これも来島の配慮が行き届いていたせいであつた。

この事件が与えた衝撃は甚大であつた。条約改正反対派の筆頭で大臣を辞職してしまつた谷干城は大隈遭難の報を聞いて日記に

「嗚呼、上君を欺き、また万民を欺き自己の非を遂げんと謀る売国の奸臣、天下(あに)これを座視せんや祖宗在天の霊けだし手を来島に借るものなるべし。輿論は即ち天意なり。天意豈恐れざるべけんや。天日未だ落ちず、なお幾多の来島を生ずべし。天道恐るるにたらずといふ頑冥者少しく戒むるところあらんや」

と記している。

皆様の協力 資料収集事業を開始

玄洋社記念館は新年度から、玄洋社に関する諸資料の収集活動を積極的に進めたいと考えています。

諸先覚や玄洋社にかかわりのある文書や写真、物、あるいはお話しとして記憶されている事柄、なんでも結構です。お話しなら、断片的な記憶でもかまいません。まず記念館にご連絡いただき、お伺いする日時など



玄洋社記念館の展示室

「ご承知のとおり、玄洋社記念館は、玄洋社の姿を後世に正しく伝えることを目的に、諸先覚の慰霊・顕彰と資料収集・展示公開を事業にしております。

今年には明治から百三十八年です。最近の世情の変化は極めて激しく、過去のこ

とは、驚くほどの速さで風化していきます。明治十二年に設立された玄洋社の、貴重な資料やお話しが、どこかに埋もれたまま忘れられることでもなれば、残念なことです。出来る限り光を当てたいと思っております。

「ご提供いただいた資料やお話しは、意義などについて玄洋社記念館で研究し、提供者にお伝えする所存です。どうか、趣旨、ご理解の上、ご協力くださいますようお願いいたします。

玄洋社記念館

館長 浅野 秀夫

連絡先

〒810-0073
福岡市中央区舞鶴 丁
目2-4-24
電話 092-771-3203

賛助会員芳名録

18年2月12日現在

(敬称略)

法人・団体の部

【三万円】

(株)日本開発 (名古屋市中)

【二万円】

菅野 憲一 (郡山市)

【一万円】

山内 雅貴 (福岡市)

竹林えつ子 (新宮町)

松本 健 (同)

田北 利蔵 (同)

奥村 芳幸 (同)

奥村 雅弘 (同)

堤田 智 (同)

箱田 洋輔 (調布市)

藤田 義一 (豊川市)

友納 博美 (同)

西川 芳泉 (福岡市)

江藤 勝己 (同)

長尾 仁 (千葉市)

阿部 珠理 (東京都)

橋田 大也 (福岡市)

友枝 文卿 (東京都)

平湯 芳裕 (名古屋市中)

天本 俊正 (横浜市)

平成18年度 会費納入のお願い

玄洋社記念館賛助会員だけに、何事にも筋を通すのには、ご健勝でございました玄洋社諸先覚の生き活躍のこととお喜び申し方を伝える当記念館の存上げます。また、日頃から当記念館の活動にご理解し、ご協力を賜り誠にありがとうございます。

さて、新年度を迎えるにあたり、当記念館は四月一日から平成十八年度分の賛助会費の受け付けを始めてさせていただきます。

【賛助会費の額】
個人 一〇二万円
法人・団体 一〇三万円
となっております。

当記念館は、昭和五十二年十一月、最後の玄洋社社長を務められた元福岡市長、故進藤一馬先生が創設されました。アジア諸国の独立に情熱を注いだ玄洋社諸先覚の貴重な資料を展示し、賛助会費によって運営されております。

わが国は、今、内政外交とも混乱を極めた状況に置かれているようです。そういう時代である

宛名は郵便、銀行とも「玄洋社記念館」です。

法人 玄洋社記念館

建設コンサルタント
建設事業の計画・調査・測量・設計・施工管理

シーアンドエス・エンジニアリング株式会社

代表取締役 花田 勲

本社 福岡市博多区東比恵三丁目二四一
〒812-0007 電話(092)48113100
東京支社 東京都杉並区高円寺南一丁目三三
〒166-0003 電話(03)537815800
営業所 千葉・浦和・神奈川・山口・佐賀・北九州・大分・長崎

福岡鮮魚市場のコア企業!! 21世紀の水産業界を領導するアキラグループ

◆鮮魚卸卸業◆

株式会社 アキラ水産

代表取締役社長 安部 泰宏

本社 福岡市中央区長浜3丁目11-13
電話092-711-6601(代表)

関連会社/株式会社コウトク水産

地下施工のトータルプロデューサー

M.S.P. (地中連続壁)・セメント工・解体工事・地下工事一式(計画及施工)

AKIRA
Oh. Fresh! Sea foods.

代表取締役社長 中村 隆輔

本社 福岡市中央区舞鶴3丁目2の6
TEL 092(751)9381
FAX 092(714)0905

出張所 熊本・長崎・鹿児島

造園・緑化

株式会社 別府梢風園

代表取締役社長 別府 壽信

本社 〒813-0025 福岡市東区青葉一丁目六・五三
TEL 092-916910(七八八)
FAX 092-916914(四五五四)
E-mail: info@shouten.co.jp

HARADOI HOSPITAL

特定医療法人

原土井病院

理事長 原 寛

〒813-8588
福岡市東区青葉6丁目40番8号
☎092-691-3881(代)
http://www.haradoi-hospital.com/

開放型病院・臨床研修指定病院

特定医療法人

原土井病院

理事長 原 寛

〒813-8588
福岡市東区青葉6丁目40番8号
☎092-691-3881(代)
http://www.haradoi-hospital.com/

玄洋社関係史料の紹介



第 37 回

宇田川文海『西南拾遺』(七)

(早稲田大学図書館所蔵)

明治十二年七月刊行

小室信介

宇田川文海編輯

『西南拾遺』巻之一

松江、藝に依て喜五郎に伴はる。(続き)

かくしつ憂きが中に日を送りて長月も過ぎしかど、新士は帰へり来ず。神無月・霜月さへくられて、はや師走の末とはなりぬ。されど松江は貧苦を忍び、逃去るべき容子も見えざれば、新士も困じ果て、又もや喜五郎にささやきしめし、此度は金百円の負債をはたす様謀りける。

かくて新士は、長の月日かへらざりし我家の内へかへり来にければ、松江は露うらめる面持もなく、姿さへ形さへやつしげなるをも厭はで、立はたらきな屈し玉いぞといひつつ、

筆筒長持てふ衣匣の底より、衣類二百余枚を出し来り、惜し気もなう喜五郎の前へ突きやり、かくして己は今着つる衣のみ残して、他は皆あらずなりたれど、少しも悔む色なかりき。喜五郎は又もや謀事図に当らざりしかど、多くの良き衣を得たりしかば、其日はこれをかい浚えて、外辺をさして立出つ。よき処にて新士に出逢ひ、騙取りし衣は残らず金に代へたりしが、又二三日おきて二人密に申合しつ。

例の如く喜五郎が新士の許え入り来り、前日の衣にては百円に不足なしつるよしひて、是非に残りを持てゆかんと責めはたりて止まざれば、松江は頗る正しき性にて、夫の巧みとも気がかざれば、昔の貞女烈婦にも、夫のために身を売りて一時の急を救ひしこと珍らしからぬ事なれば、いかで妾もさるべきところへ売代なしつ。その身の代をもて負債を済し玉はれと、泣く泣く頼み聞ゆれば、新士は更なり、喜五郎も這は思ふ凶にはまれりと心にうなづき、面にはわざと悲しき面持なしつ、さまざま憂を語り聞えつ。

程能き頃を見すまして、身売の商議を調べて、遂に喜五郎に何事も打まかすこととはなりぬ。其夕暮に喜五郎は約束なりと松江をつれに来りしかば、斯うと覚悟はせしものの、親にも告げず、夫に別れ、いかなる処にやゆくらんとおもへば、涙に忍びかね、只伏沈むのみなりき。

頃しも十一月の末つかた、寒風の破障子を吹きぬきて、肌はきるるばかりの思ひをなし、吹雪は荒れたる軒を穿ちて面をも打つ様なれば、いとさへかなしさのいやまして、哀れなんどいふも中々愚なり。

喜五郎は時刻移るとせき立つるに、松江は涙を袖に包み、うやうやしく夫に向ひ長の別れの暇を告げ、弱る心をはげまして、やがてぞ其処に立上れば、喜五郎ははやく疾く疾くとせり立て、門辺をさして連れ出てけり。外は早朝より降積る深雪に道も埋れて、行人さへも迹絶し黄昏、おぼつかなくもあゆみゆく。足にははくべき足駄もなく、跣足に雪を踏分けて、肌は薄き袷衣一枚うがつのみなれば、身内わなわな打震ひ、躍る足元ふみしめふみしめ、稲葉町(因幡町が正しい)てふ処までたどり来にける折柄、彼方の方より五六人の人々一挺の駕籠かたげさせ出たりしが、松江等とすれちがひ様、彼方の一人つかつかと喜五郎の傍に近きより、引かすいでドウと投げ、起上らんとする処をしたたかに踏にじりて、いたくこれを懲しめけり。

さて其後は心に懸る者なしとて、新士は又も若藤屋にあびたりて、小梅とわりなく契り居りしが、其年も暮て、あくれば明治四年の春、正月も事なくすぎつ、如月の半とはなりぬ。遠近の梅花おもしろう咲き匂ひて、やや暖かなる時候ともなりければ、新士は小梅の手をひきて、博多柳町なる新一力亭といへる梅屋敷にぞいたりける。

己が名におふ小梅の心には、君ならで誰にか見せん梅の花。色をも香をも知る人ぞ知といひしも、妾の心ばえに侍りなんどいひて、千話狂ひつつ打興じ居たりぬ。

折しも奥の一間に差向ひて酒傾むくる武士あり。初は誰とも分たざりしが、少時すると一人の壮年廁やにゆくとして此方に来り、ふと面見合はして驚けり。是なん新士が師と頼みし、庄林又七郎の同門の交りある鹿兒島の土族野口種成と云ふ者なりき。二人はかたみに打驚きて、相別れてより久しかりし心を述べつ。やがて今一人をも爰処に招きて、酒汲みかはし酒宴に興をぞ尽しける。

其日は事なく別れて帰り、其後は数々彼両士と行通ひ、何かひそひそ密談なりして、両士は何国へか立去りしが、如何なる事かを語りひけむ。知る者絶えてなかりしが、西南の事ありて後、扱はと思ひ合する人もありしか聞えし。



かつての因幡町。今は福岡市の繁華街、中央区天神一丁目